
魔法少女リリカルなのは～魔王に愛されし少年～

TPPなんか恐くない

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜魔王に愛されし少年〜

【Nコード】

N4950Y

【作者名】

TPPなんか恐くない

【あらすじ】

少年はこの平和な一時が続けば良いと思った、でもそれはある日を境に日常が非日常へと変わってしまう。これはとある少女達が願いの叶うと言われる宝石を求めて戦う物語の裏側で始まったもう一つの物語りである。

プロローグ（前書き）

TPPに参加して二次創作が消えるかもしれない？

だがあえて私は作品を投稿しようじゃないか！！

プロローグ

海鳴な街のとある公園

まだ昼間だが、その公園のベンチに幼い一人の少年が座っていた
特になにをするでもなくポーツと空を眺めているだけ

毎日毎日、少年はベンチに座って暗くなるまで空を眺めていた
そんなとある日、少年は砂場で一人で遊んでいる少女を見つけるの
でした

最初はなんとなく見ているだけだったけど時間が経つにつれて少年は
少女のことが気になってきたので話しかけてみることに

「ねえ、なに作ってるの？」

「ふえ？」

まさか自分に話しかけてくるだなんて思っていなかったのだろうか、
少女は驚きながら少年を見上げた

「ねえ、なに作ってるの？」

「……別になにも」

少女は顔を俯かせてそう答える

「へえ、じゃあ僕と一緒にになにか作ろうよ」

「私と一緒に?」

「うん」

「……本当になのはと一緒に遊ぶの?」

もう一度、肯定の頷きをするとなのはと名乗った少女が突然泣き出してしまった

「どうしたの!　もしかして僕がなにかしちゃった!?」

「ううん……違うの、なんでもないの」

なんでもないはずがないと思いつつも少年はそれ以上はつっこまなかった

しばらく少女が泣き止むまで待つ

少女は泣き止むと笑顔でこちらを向いて笑顔で

「さあ、はやく遊ぼう!」

そう言ってきたのだった

その日から二人は毎日遊ぶようになった

そしてその日が全ての運命の物語の始まりだったとは、この時は知る由もなかった。

「ん……懐かしい夢だったな」

朝の日差しで目を覚ました真紅の髪の少年

名前を鎗水仙やじみずせんと言う

「ん、なのはお姉ちゃんからメールだ」

なのはと言うのは一っ年上の幼なじみで先ほど夢で出てきた少女のことだ

仙は携帯を開いて内容を確認すると『おはよう』という一言

あの朝が弱いなのはお姉ちゃんがこんな時間にメールを送ってくるだなんて今日か明日にでも嵐が来るのではないかと考えてしまう

とりあえず『おはよう』とメールを返して着替え始める

着替え終わり、朝ごはんと思ったが両親が今日の朝早くから三泊四日の夫婦旅行に行っていることを忘れていた

小二の息子を一人残して旅行に行くとはこれ如何に、と両親の放任つぷりに呆れつつ朝食のことを考える

「お、そうだ」

僕は急いでなのはお姉ちゃんに電話する

すると1コール以内にお姉ちゃんが電話に出た。

『もしもし、セン君!?!』

「おはよう、なのはお姉ちゃん」

『おはようなの!』

朝から元気が良い、本当に明日は嵐でもくるんじゃないか?

「突然なんだけどさ、そっちにご飯食べに行つていい?」

『構わないの!』

「いや、とりあえず桃子さんとかに聞くつてことをしてよ」

『ふふふ、ちょっと待つてるの!』

電話の向こうから「お母さん!」て声がある

それからしばらく、なのはお姉ちゃんが戻つてきた。

『全然構わないつて!』

「うん、聞いてくれてありがとう。今からそっちに行くね」

僕は通話を切って、学校の荷物を持つと早速、高町家に向うのであった。

高町家は自宅から一分以内のご近所さん

昔から士郎さんとかにはお世話になってるし、高町家のみんなとは仲良しだ。

「遅いのセン君！」

「……いや、まだ電話してから五分も経ってないんだけど？」

高町家に前には仁王立ちしてプリプリ怒っているお姉ちゃんが居た

「にやはは、それもそうなの。じゃあ早くお家に入ろう」

僕の腕に抱きついてきて笑うお姉ちゃん

うむ、僕もお腹が空いたし早く入ろう

「いらっしやいセンちゃん」

出迎えてくれたのは高町家のボス、高町桃子さん

「お、仙君おはよう」

そしてリビングで優雅にコーヒーを飲んでいるのは高町家の大黒柱、

高町士郎

二人とも三人の子を持つ親とは思えぬほど若い

「桃子さんにシローおはよう」

「よし、毎回言っているが桃子をさん付けで呼んでいるのに僕だけ呼び捨ての理由を聞かせてもらおうか」

「断固拒否する」

キリツと言う僕に何故か溜め息を吐くシロー

「仙、来ていたのか」

「朝からなのはとくつついちゃってラブラブだね」

振り返るとそこにはなのはお姉ちゃんの兄の恭也と姉の美羽が居た

「むふふ、そうでしょラブラブでしょ！」

嬉しそうにくつついてくるなのはお姉ちゃん

愛されているみたいです

「ははは、ラブラブなのは良いが早く朝食を食べようか」

「「「「はい」」」」

この平和な一時

僕はいつまでもこの平和な一時が続くようにと願います

プロローグ（後書き）

これからもよろしくね！..！

第一幕（前書き）

さて……相変わらずの駄文ですがお付き合いください

主人公の戦う時の構え方が表現しにくいので想像が出来ずに気になる方は「くじょうしんりゅう 玖錠降神流」で検索を

では本編をどうぞ

第一幕

あれから朝食を食べ終えて、学校へ向かうバスに乗る

「うにゃ〜……センくん……」

その一番後ろの席に座るとなのはお姉ちゃんは僕の膝枕で寝てしまった

「おはよう、仙ちゃん」

「相変わらずいつもなのはとべったりね」

バスに乗り込んできたのはなのはお姉ちゃんのお友達の日村すずさんとアリサ・バニングスさん

「おはようございませーす」

「なのはってばどうしたの?」

「今日は珍しく早起きしていたんで、眠かったんだと思います」

「なのはが早起き……明日は嵐かしら?」

「やっぱりそう思います?」

流石はアリサさん、分かってらっしゃる

「二人とも、それは酷いよ」

そして唯一の良心である、すずかさん

ここだけの話なんだが俺はこの二人を疑っている

人柄とかではないんだけど、どうもこの二人……“きな臭い”

まあ、今のところ問題はなさそうだから構わないが

「いやいや、寝坊助のなのが早起きよ？」

「そんな、たまにはそんなこともあるんじゃない？」

寝ているのはお姉ちゃんを気遣ってか、前の席に座った二人はそのままお姉ちゃんの早起きについての議論を交わし始めてしまった。

気づいたけど、バスの中で膝枕して寝るのって中々邪魔じゃないのか？

そう思わずにはいられない今日この頃だった。

放課後、僕は家に帰ってきて夕飯を食べに高町家へと来ていた

「へえ、フェレットが倒れていたんだ」

「そうなの、ちゃんと獣医さんのところに連れて行ってあげたの」

偉いことしたんだから褒めて

と言いたいのか、こちらに頭を差し出してくるのはお姉ちゃんだから僕は素直になのはお姉ちゃんの頭を撫でておく

ちなみに、今日はなのはお姉ちゃんが塾に行くために別れて下校していたのだ

いつもは一緒に帰ってるよ

夕飯を食べ終わってお風呂にまでお世話になった

なのはお姉ちゃんと一緒にお風呂で遊びすぎて桃子さんに少し怒られちゃったけど

そして家に帰り、のんびりした後

もう寝ようと思いき寝室へと向かう

「ん？ あれは」

窓の外

高町家から出てきた一人の人影

「こんな時間になにやってるんだらう？」

出てきた人影の正体はなのはお姉ちゃん

なのはお姉ちゃんは辺りをキョロキョロとした後、どこかへ向かって走り出してしまった

「こんな時間に一人で外出なんて危ないなあ」

仕方ない、僕も付いていくか

「ふむう……見失った」

いや、そもそもなのはお姉ちゃんがどこに向かうかもわからなかったのだし

家を出て、姿が見えなかった時点で諦めるべきだった

一応、捜してみたけど見つからなさそうだし帰るか

そう思い近道である公園を抜けようとした時だった

「……………え？」

恐る恐る下を向く

そこには僕の胸から突き出ている僕の血で濡れている腕だった

意味がわからない

「ゴフツ!!」

吐血する

引き抜かれる時に肉を引き摺り出される感覚が分かる

振り返る時に裏拳をする

放った裏拳は見事に俺の背後から胸を貫いたなにかに当たった

そう“なにか”に当たったのだ

僕は目を見開いて驚愕する

そこには黒い霧のような何かに包まれた、これまた黒い西洋の鎧を着た人のような“なにか”だったのだ

鎧を着ているように見えてその実、拳が当たった感触はまるで柔らかいマットを叩いた時のようだった。

「

」

ドンツと僕が3メートルほど吹き飛ぶほど強い力で押される

「ぐう……!!」

もちろん心臓付近を貫かれた僕は無惨にも地面に転がる

視界も霞んできた

声も息をする音しか出なくなってしまった

体温が急激に低下していくのが分かる

つまりは 僕はここで死ぬと理解してしまう

訳も分からない奴にいきなり後ろから刺されて死んでしまうのだ

「ああ、本当に短い人生だった」

僕はそう呟いて、目を閉じた

あれ？

パチツと目を開けてみる

視界は霞んでいた筈なのにクリアだ

声はいつの間にか戻っている

体温も至って普通

なにが起きた？

僕は起き上がり思わず自分の身体をまじまじと見る

刺されたはずの胸は再生している

あれは実は夢だったのか？

だがそれは違つと断定できる

貫かれた部分の衣服は破けているし、なにより“なにか”は依然として先程と同じ位置に居た

「

」

“なにか”が戦闘態勢に入ったのが理解できる

ははは、こりやまずい

なぜ俺は死なずに、傷が治っているのかなどもはや考えている場合ではない

不思議と僕の思考は冷静であつた

しかし同時に今にもオーバーヒートするのではないかと思うほどのフル回転をしていた

まずは現状の把握だ

恐らく敵は一人、そして僕も一人

僕の身長は相手の腰ぐらい

攻撃力は今さつき味わつたばかり

速さも確実に向こうの方が上

逃走できる確率は間違ひなく低い

ならば戦う？

いやいや待て待て

たかだか僕は小学二年生だ

こんな化けもの相手になにが出来る？

逃げ切るといふ勝てる確率の低いギャンブルに挑戦もしてみたいけど僕が背を向けた瞬間、僕は殺されるだろう

「ははは……これが絶対絶命ってやつか」

あと背水の陣だっけ？

まあ良いさ、逃げるくらいなら戦おう

逃げて殺されるよりも僕は戦って勝つ可能性に賭ける

僕はそう決意して構えをとる

身体を相手に対して半身になり、左手は手の平が自分の身体とは逆のほうに捻り肘を曲げて顔の前、丁度アゴか頬の持つてくる

右腕は肘を曲げて、さながらガッツポーズのような感じだ

両の拳は、ちゃんと第二関節だけ曲げが人差し指と中指だけは第一と第二関節を曲げて少しだけ突出させる

僕は今日何度目かの驚愕をした

なぜこの構えにしたかは分からない

でも自然にこういう構えをとっていた

そして構えをとった瞬間、頭の中に『玖錠降神流』という単語が入ってくる

「は、ははは、なるほどね……そういうことか」

まるでパズルのように1ピースが埋まると連鎖的に情報が流れてくる

「なるほどなるほど、理解した」

玖錠降神流

それが僕の使う武

そしてこの武があれば目の前の敵にも勝機はあるかもしれない

「……！」

“ なにか ” が甲高く咆哮をあげる

いいね、やろうか

そして僕は記憶の中から引きずり出してきた知識をもとに口を開いた

「今さらに雪降らめやも陽炎かげろいの燃ゆる春へと成りしにしものを

これが初戦闘、相手は未知数だし初っ端から本気で行くのが最善だろう

「おん・まりしえいそわか摩利支曳娑婆訶

それはある種の瞬間自己催眠を意味するのか、唱え終わるとほぼ同時に仙の纏っていた気が変質していく

猛烈に、だが曖昧に、存在そのものがズレるような。まるで陽炎が蜃の夢。

二重、三重、四重、五重

際限なくぶれて

重なっていく彼のどれが本体なのか分からない。

否、もしかしたら、全てが本体なのではなからうか。

多重身

玫錠の秘伝はそれだった。

だが少年は本来の正統派な玫錠流ではなく『歪み』を宿していた

「さあ、行くぞ化け物！」

この日、少年の日常は非日常へと変わり、願いの叶う宝石を求め物語の裏で行われていた物語が始まったのだった。

第一幕（後書き）

感想をお待ちしております

そして同時に玖錠降神流の構え方の説明文も分かる方は教えていた
だきたいと思えます

第二幕（前書き）

お久しぶりです、執筆と投稿が亀速度で申し訳ありません

とりあえずは第二幕です、どうぞ

第二幕

「……なんなのこれは？」

なのははそう呟いた

ジュエルシードを封印して、騒ぎを聞き付けた警察のパトカーのサイレンを聞いて慌てて家の近くの公園に逃げてきたのだがそこにはクレーターができていた

「一体なにがあつたの？」

時は三十分ほど前に遡る

深夜の公園では正真正銘の死闘が繰り広げられていた

黒いなにか……黒騎士は仙よりも先に仕掛けた

三メートルの距離を僅か0.2秒で詰める

仙はそれに合わせるように右の脚を上げる

黒騎士は急停止をして見事に上体を後ろに反らすことによって回避をする

だがしかし回避をしたはずの黒騎士は鈍く大きな打撃音とともに反らした上体が前へと戻され、正中線に四連撃をおみまいさせられた

「

!?!」

致命傷ではないにしろ、決して軽くはない攻撃を浴びせられた黒騎士
黒騎士に理性という物があるかは定かではないが、あるとしたら黒
騎士は確実に驚愕していた

自分と戦おうとしてきた者だけでも珍しいのに

今までにみたことのない構え

硬気功で身体を強化し、貫気で一撃の威力も一般の成人男性を遙か
に越えている

攻撃を放つ際の踏み込みでクレーターが出来たし

自分の腰辺りまでしかない身長少年だが恐怖するに値する

さらには今の技

突如として後頭部からの衝撃で前に態勢が崩れ、四発も蹴られた

少年は一人だけのはず

なにかを仕掛けるようなことはさせていないし、していなかった
ならばなにが起こった？

「……………」

数秒の思考の末、黒騎士は身を翻した

「あ、待て！」

仙の言葉にも反応せずに黒騎士は夜の闇へと姿を消すのだった。

静寂

仙はしばらく固まっていたが完全に黒騎士が居なくなると分かる
と大きく息を吐いた

「……………生き延びた、か」

正確には一度死んでるけども

だが間違いなく今さっきまで僕は死地に居た

初めての修羅場

それを乗り越えることが出来た

そしてなにより

「玖錠降神流を手に入れた」

それが一番大きく、そして己がなんなのかも理解してしまった

「はあ……………こりゃあ他の人には言えないよなあ」

ぽつっと呟いて仙は疲れたので自宅に帰ることにした

黒騎士のこともあり、それについて考えながら

そして、当初の目的を忘れながら

余談ではあるが家の前でようやく当初の目的を思い出したのだっ
りする

翌朝、少年は身体にのし掛かっている重みで目を覚ました

「はぁはぁ……セン君の寝顔ってば可愛いの」

目を覚ますとそこには寝ている僕の上に鼻息を荒くしているのは
お姉ちゃんが居た

おおっ？

しかもなんだかくねくねしてるし

「ん、おはよう」

僕も朝は弱くて、よく二度寝するけど流石にこの状況は目が覚める

「あ、おはようなのセン君！」

お姉ちゃんは僕が目覚めたのが分かると押し倒すように抱きついてくる

むう、起き上がれない

「お姉ちゃんどいてよ〜」

「断固拒否するなの」

なんだと？

そんなこんなで学校

お姉ちゃん達とは学年が違うので学校が終わるまではお昼休み以外はお別れだ

授業中、僕は先生の声をBGMにブーツと外を眺めていた

ふふふ、窓側の後ろから二番目という席をクジで勝ち取った僕の引き運を褒めてあげたい

って、そんなことを考えるつもりはないんだって

僕は外を眺めながら昨日のことを思い出していた

突如、僕のことを殺しにきた
謎の黒い騎士甲冑を着たアイツ
実際には一回殺されてるけど

雰囲気でわかる、アレは人間じゃない

もっとう別な、人間とはまた違った次元の生物

むしろ生物かもわからない

だが到底、機械には思えない動きだった

結果的に言えば奴に殺されたおかげで僕は『玖錠降神流』を使えるようになったのだが

玖錠降神流……しかも僕の場合は陰の部分が強いせいで普通とは違う

強いて言うならばただの人間ではなくなってしまった

格闘技の世界チャンピオンと戦っても負ける気はしない

……いや、能力と気で身体を強化すればの話だよ？

なんにもなしでやったらボコボコにされるのは間違いない

技能とかは今後、鍛えていくしかないか

あの黒騎士がなんにしる、今は鍛えよう

今後、アイツがまた来るかもしれないし、もしかしたら一人だけじゃないかもしれない

今の自分に足りないのは経験だ

力や技はまだ補う方法がある

でも経験っていつても相手は人外レベルの相手だし、そう簡単に経験なんて積める訳がない

はあ……どうしよう？

そんな悩みを抱えながらの昼休み

僕はいつも通り、屋上へご飯を食べに向かう

そして屋上への扉を開けると

「やっとセン君が来たの！！」

「……あつ、人外戦闘民族」

「にゃ！？」

なにやら驚いている、なのはお姉ちゃん

そつだよ、なんで忘れていたんだ

身近に人外クラスの戦闘力を持っている高町家が居たじゃないか

決めた、帰ったらシローに頼んでみよう

「セン君！ 私は人外ではないよ！！」

「うん大丈夫、いつも通りのなのはお姉ちゃんだよ」

戦闘民族なのに唯一、戦闘に向いていない

いつまでもそんな彼女で居てほしい

「なぜだろう、馬鹿にされてると思うのは」

「気のせいだよ、気のせい」

危ない、バレるかと思ったよ

「はあ……なにが悲しくて毎日、昼休みにあんたらのイチヤイチャを見なきゃいけないのかしら」

なのはお姉ちゃんの後ろの方からバニングスさんの声がした

丁度、なのはお姉ちゃんで見えないから気づかなかった

「あれ、今日は月村さんはいないの？」

「ちょっと先生に呼ばれてていないだけよ」

なんだ、そうか。

お腹も空いたけど月村さんが来てないならまだ食べる訳にもいかないな。

僕はなのはお姉ちゃんに抱きつかれながらもアリサさんの近くに寄る。

そしたら

「っ!?!?」

瞬間、背筋が凍るような冷気が稲妻のように走った。

慌てて後ろを振り向く

しかしそこには誰も居ない。

「どうしたのよ、仙?」

「顔色悪いけど大丈夫?」

「え……あ、うん」

心配そうにこちらを見てくる二人に僕は大丈夫と答える

今のは一体……

今の感覚、あの『黒騎士』と向かい合った時と同じ感覚だ。

「いや、気のせいだな」

無駄に気張り過ぎてるんだ、もうちょっとリラックスせねば。

勘違いだと自分に言い聞かせ僕は月村さんを待つことにした。

この時、僕は貯水タンクの上から僕たちを見下ろす人物に気が付いて居なかったのだった。

「……………」

人影はそれからしばらく少年たちを見下ろして、姿を消したのであった。

第二幕（後書き）

頑張るぞ〜!!

第三幕（前書き）

お久しぶりです

第三話です

では本編へどうぞ

第三幕

「という訳で、相手になってよシロー」

「ふむ、なにがどういう訳かわからないんだが」

僕は学校が終わると急いで帰ってシローに会いに来た

「シローってすごく強いんでしょ？ だから僕に稽古付けてよ」

この時、士郎は悩んでいた

昔からこの少年のことは知っているのですが、こういう時の少年がなかなか退かないのも知っている

こちらとしては剣術を教えるつもりがないし、どうやって少年を説得するか

「駄目だよ仙、どこで知ったか知らないが僕がやっているのは剣道ではなく剣術だ。仙を疑っている訳じゃないけど、危険だから教えるつもりは」

「ああ、違うよシロー」

「なにがだい？」

「僕は別に剣術を教えてほしい訳じゃない」

仙は一拍だけ間を置いて言う

「僕が教えて欲しいのは実戦だ」

そう言った仙の瞳は決意を決めた者にしかできない、強い瞳であった
そのことにシローは思わず身をたじろぐ

「（なんとという目だ。熱く、それでいて静かに、透き通るような綺麗で純粋な輝きを放っている）」

実の息子であり、自分の剣術の全てを伝えてきた恭也がこのような瞳を持てるぐらいに成長したのはいつぐらいだっただろうか？

僅か数えで7歳の少年がこのような瞳を出来るだなんて……

「……一体、君になにかあったんだい？」

だからこそ、そう聞かすにはいらなかった。

今朝は時間的に会えなかったために最後に仙と会ったのは昨日の晩だ
昨日の晩から今の間になにかがあったのは間違いない

「……簡単だよ、僕は守りたい物（日常）があつて、今それが壊されるかもしれないんだ。それを壊されずに守りぬくためには力がある、中途半端ではなくちゃんとした力があるんだ」

「……しかし、実戦を教えるにしてもすごく危険なんだっ！」

士郎は寸止めのつもりではあるが、当てるならば回避不可能なはずの速度で手刀を仙の首筋へと目掛けて放つ。

「っー！」

しかし士郎の予想は大きく外れて、自分の手刀を仙は回避するどころかカウンターで自分の顎の真下に拳を持ってきていた。

「どう？ これでも危険だっていうの？」

「……………」

士郎はそつと目を閉じて昔のことを思い出していた。

昔、あれは自分が大怪我をして生死の境を彷徨っていた頃の話だ。

一家の大黒柱である自分が居なくなったことで、家族の心は荒んで行ってしまった。

桃子は翠屋の仕事に

恭也と美羽は剣術の修行で力を求め

そんな家族の為になのはは『良い子』にならなければならなかった。

我儘も言いたかっただろう

でもそれは言えなかった。

次第になのはは心を閉ざしてしまった。

公園で一人で遊ぶ毎日

小学生にもなっていない子に、そんな風にさせるとは家族として凄く情けない話だ。

そんなある日、なのはに友達が出来た。

一つ下の男の子

名前は鑑水 仙

一人だった日常が、二人になった。

それは小さいようで、すごく大きなこと

なのははそれから毎日、仙と遊ぶようになった。

向こうの家族も、こちらの家の事情を知っていたのかなのはを鑑水家に泊めてくれたことも何度もある。

閉ざされかけたなのはの心を開いてくれたのは間違いなく仙だ。

まあ、そのことをすべて知ったのは僕が退院してからののだが

初めて会った時の、あの幼かった仙が、今、こうして僕に決意を固めた目をして拳を向けてきている。

実の息子のようにも思っていた子だ。

この成長には感動を通り越して、畏怖の念さえも覚える。

よくぞここまで成長したな、仙

閉じていた目をそつと開けて士郎は口を開いた。

「……僕の修行は優しくないぞ？」

「上等！」

ニカッと笑う仙

ふふふ、本当に遅しく育ったものだ。

第三幕（後書き）

感想をお待ちしております

第四幕（前書き）

よしせしあま

五話目です、よしせしあま

第四幕

私はいつも一人だった

私はいつも暗い闇の中にいた

でもある日、私には一筋の光が差し込んで来たの

あれは今でもハッキリと鮮明に覚えている

その日、私はいつも通り一人で公園で遊んでいたの

家に居てもつまらないし、なにより家族の迷惑になる

あの家に私の居場所はない

そう思うと涙が出そうになる

だけど私はグッと堪える

もう毎日同じことをやっているのだ

堪えることには慣れてしまった

せつせとなにを作るかも決めていないのに砂を盛っていく

つまらないの

「ねえ、なに作ってるの？」

「ふえ？」

突然、上から声がして顔を上げるとそこには一人の男の子がいた

「ねえ、なに作ってるの？」

もう一度、同じように男の子は話しかけてくる

なにを作ってるって……

「……別になにも」

なにを作るかなどと考えてもいない

ただ単に砂を盛っているだけだ

私は顔を俯かせて、また砂を盛り始めようとしたら

「へえ、じゃあ僕と一緒になにか作るっよ」

ドクンッ！

と心臓が跳ねるのが分かった

「私と一緒に？」

「うん」

笑顔で肯定してくる男の子

「……本当になのはと一緒に遊ぶの？」

今までなのはと誰も遊んでくれなかった

だから信じきれなかったからもう一度、聞いてみた

すると男の子は声は出さなかったけど確かにしっかりと頷いてくれた

それが凄く嬉しくて思わず泣いてしまった

「どうしたの！　もしかして僕がなにかしちゃった!？」

泣き出した私を見て慌てる男の子

「ううん……違うの、なんでもないの」

ただ嬉しくてつい泣いちゃっただけなの

しばらくして私が落ち着くと男の子は笑顔で私に向かって

「さあ、はやく遊ぼう！」

そう言ってきた

その日から私と男の子
って毎日、一緒に遊んだ

鎗水仙は家がすごく近かったこともあ

時には私の悩みとか考えを聞いてくれたし、
仙くんも悩みや考えを話してくれた

私の全てを知っている仙くん

私だけを見てくれている仙くん

私だけのことを考えてくれている仙くん

あの一人の闇の中から助けってくれた仙くん

私には仙くん無し我的生活だなんて考えられないし考えたくもない

仙くんの隣に居て良いのは私だけ

私の隣に居て良いのは仙くんだけ

だから私は仙くんを私から奪おうとする者あるいは仙に危害を与える者を許さないの

「……………だから私は戦わなくちゃいけないの」

「なにがだから!? とりあえずはその包丁を離して落ち着いて!」

私は今、アリサちゃん達と学校から帰ってきてみたら

道場の方からボコボコになって足まで引き摺りながらやってきた仙くんを見つけた

その後ろにはお父さんがいた

状況を見て確実にお父さんが仙くんをボコボコにしたのだろう

台所に向かい、包丁を手に取る

先程も言った通り、仙くんに害を仇なす奴は絶対に許さない

それが例えお父さんであつてもだ

「離してなの仙くん」

「なら包丁を下ろして!!」

丁度、包丁を手に持った時に仙くんに捕まってしまった

どうしてボコボコにした相手を庇うのか意味が分からないの

理由を聞いてみると、どうやら仙くんが自分から修行を付けてほしいと頼んだらしいの

良かったの

仙くんがお父さんになにか弱みを握られてるとかじゃなくて

でもなんで修行を付けてもらおうとしたのだろうか？

聞いてもなんか曖昧にしか答えてくれない

むう……気になるの

でもここで無理矢理聞き出すのも仙くんからの好感度を下げたしま
うだけかもしれないので聞かないでおく

とりあえず仙くんの傷を治療しなくちゃいけないの

待てよ、これはこれで仙くんのお世話ができるから良か
ったのではないのか？

ついそう思ってしまった私であった

第四幕（後書き）

さて、次はどうするかな？

第六幕（前書き）

どうもお久しぶりです

第六幕です

第六幕

シローと稽古するようになって、それなりに実戦経験は付いてきた予想外というか予想通りというか、シローは人外の相手とも戦ったことがあるらしい

流石に玖錠降神流は見切れきられてはいないけれども、それでも互角以上に戦ってくる

いいや、僕が武気まで使って本気なのに対して、まだシローは本気じゃないだろうな

だから僕はギリギリ戦えている

今もシローは僕の降神流の攻撃を二撃目まで避けているし

「はあああああああああつ！」

都合、十一度目の正面と他方向からの拳の壁

この異能の力が成せる技に士郎は冷静に思考を巡らせる

「神速」短く士郎が呟き、気がついたら木刀の剣先を仙の喉元へと突き付けていた

「……………参りました」

仙は両手を上げて降参をする

士郎は剣を下ろして一息をついた

「むう、また勝てなかったか」

「ははは、まだ稽古を始めて一週間も経ってないのに御神流の技を使わせるだなんて凄いことだよ」

御神流

戦鬪民族である高町家の使っている古武術で

正式名称は『永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術』

というらしい。

もうね、さっきのを見て分かる通り『神速』などの人外レベルの技があることから普通の古武術ではないのは明白だ。

「まあ、僕の能力に依存しきっているせいでもあるんだけどね」

「ははは、まだまだ修行が足りないんだよ」

それは否定できないな。

でもその実践不足を補うためにこうして稽古をしているんだ。

「仙が見たという黒騎士、まだ相手の実力は未知数なんだ。用心せねばなるまい」

「うん……その通りだ」

僕は修行を始めるにあたって、シローだけでは黒騎士のことと自分の能力についてを教えた。

実戦経験豊富であるシローに今の状況と敵の事を教えれば僕が考え付かないようなことを思いつくかもしれないからだ。

だけど、シロー以外には誰にも知られてはいない。

もちろん、なのはお姉ちゃんにもだ。

この稽古の内容についてもシローが誰も見学させていない。

僕の異能を秘匿するためだ

そんなシローの心使いに感謝してもしきれない。

仮になのはお姉ちゃんとかに知られたらなにを言われるかわかった物ではない

絶対に怒るに決まっている

「さて、今日はここまでにしようか。そろそろ夕飯の時間だ」

僕もお腹が空いてきたし、終わりにするか

「どうする、仙も食べていくかい？」

「うーん、お母さん達ももう旅行から帰ってきてるし……どうしようかな？」

なんてことを話ながら二人でリビングに向かうとそこには

「やつ！ 鍛えてきたみたいだね我が息子よ」

笑顔で片手を上げて話しかけてくる黒髪の女性が居た

「あれ？ どうしたの母さん」

その女性こそ僕の実の母である

名前を鎗水星やらみずとせいいう

「いや〜、なんか夕飯作るの面倒臭くなっちゃって。仙が土郎となにかやってるみたいだし、ついでにご飯を作ってもらおうと思ってな」

「いやいや、高町家に迷惑かけちゃ駄目でしょう」

「そんなことないの！〜！」

声と共に背中からなのはお姉ちゃんが抱きついてきた

「うわわ！ なのはお姉ちゃん！〜！」

急に現れたからビックリしてしまった

「こんばんはなの、仙くん」

僕の頭が、なのはお姉ちゃんの胸に押し当てられる

「な、なのはお姉ちゃん」

「どづしたの仙くん？」

「僕、稽古終わったばかりで汗臭いよ」

ついさつきまで結構ガチな戦いをしていたし、汗をたくさん掻いただから汗臭いはずだし、なのはお姉ちゃんに汗臭いとか言われたくない

「え……そんなことはないの」

キョトンと不思議そうな顔をしてなのはお姉ちゃんがそう言う

「仙くんの匂いが臭いだなんて、ありえないことなの」

だから抱きついてても問題ないの、と言わんばかりに身体を自分へと引き寄せるなのは

仙は本当にそうなのかと考えつつも、なのはの思いがままに身を委ねる

実際になのはは今までに仙を臭いと思ったことはない

むしろ、この汗臭さもなのはにとっては仙の匂いがより強烈に感じられる至福のものであった

「さあ、ラブラブなのは良いけども早くご飯を食べてみましょうか」

「はい」

桃子に促されて二人は席に着く

その夜、深夜の話だ

僕は家の屋根の上に立って町を見渡していた

「……………」

本当は寝ようとしていたのだ、なのに嫌な予感が止まらずにいたのでこうして屋根の上に立って警戒をしている

「……………見つけた！」

臨海公園の辺りから不気味な気が放たれている

身体中に武気を注ぎこみ、身体強化をする

屋根伝いに跳んで臨海公園を目指す

一度、死んでから僕の身体には色々と変わった

その一つに『気』がある

しかも気には何種類があるらしい

例えば、今使っているのは『武気』^{ぶき}

身体強化に秀でていて、これを使えばシローとも十分に渡り合える

次に『硬気』^{こうき}

これは防御面に秀でた気だ、まるで鋼鉄のような防御力を手に入れることができる

シロー曰く、素手で刃物とつばぜり合いができるらしい

そしてもう一つ、名前が分からないので敢えて『神気』^{じんき}と呼ばせてもらうが、この気は『玖錠降神流』に使う時に使用する物である

これを総じて『気』と呼んでいる

気を使うことが出来るようになると自然に生き物の放つ気を見るこ
とができるようになる

よって今回、臨海公園から放たれる不気味な気を発見することが出
来た

「さて、そろそろか」

僕は臨海公園の入口へと降り立つと直ぐ様、硬気を纏う

武気と硬気の良いところは永続的に消費する気が低いところである

僕は細心の注意を払いながら臨海公園の敷地へと脚を踏み入れるの
であった

奥に向かえば向かうほど不気味な気は濃くなっていく

そして、臨海公園の中央広場に着くとその不気味な気の正体が明らかになった

「

」

そこには四つ足で獣のような身体に目が三対ある虫のような化け物が居た

その足元にはまだ二十代ぐらいの若い女性があり、その女性の首筋と頭には化け物の口から伸びた管が刺さっていた

まるでなにかを吸いとっているかのようにも見える

「

」

こちらに気がついた化け物が僕を見てくる

そして化け物は女性から管を外して僕へと向き直ると

「

!!」

耳鳴りがするような甲高い声を出して僕へと襲い掛かってきた

「くっ!」

それを地面を転がるように避ける

急いで立ち上がった後ろへと跳躍して距離をとる

軽トラック程はある巨体でよくまあ、あんな速く動けるものだ
分かってはいたことだが手加減して勝てる相手ではないな

僕は半身になり玖錠降神流の構えをとる

「庵・摩利支曳娑婆訶まじしえいそわか

いつもの一種の自己暗示をかける

僕の姿はブレ始めた

「行くぞ!!」

武気で強化した足で地を蹴りつけ一気に化け物へと肉薄する

「ハッ!!」

右足での頭部への蹴り

化け物は顔を上に上げてそれを回避しようとする

だがそれは頭上に現れた足の踵落としによって許されず、直撃を喰らった

完全な不意打ち、化け物はわけも分かってはいないのか戸惑うかの
ような声を上げていた

そこへ仙は追撃を加える

拳で殴り、足で蹴り、肘で打ち、膝でかち上げる

通常の生物ならこれで絶命をしているだろう

しかし相手は異形の生物

そんな常識は通用するはずもない

「

!!」

怒り心頭だと言わんばかりに甲高い声を上げて腕を振り回す

仙は大きく後ろに退いて回避をする

「結構、今のは自信があっただけだな」

先程の六連撃

間違いなく仕留めるつもりであったが、どうやら化け物には対して効いてはおらないようだ

どうやってアイツを倒すか

そう仙が考え出した時だった

化け物は仙へと無数の管を飛ばしてきた

「なっ!?!」

その数およそ十七

一斉に仙へと向かってくる

「うおおおおおおおおお！？」

その一つ一つを紙一重で避ける

常に二手先までよんでの回避をしなければならぬ

相手の体力は自分よりも上だろう、つまりこれは終わりの確定したゲーム

このままいけばいつか僕は捕まってしまうのは明白だ
ならば

仙は両手に貫気を纏い、向かってくる管に向かい手刀を繰り出す

そして管は見事に切断された

「やった！」

それは一瞬の気の緩みであった

しかし真剣勝負の世界においてその一瞬は生死を分けるには十分な時間である

仙が切断した管、その切断部分から新たに管が再生され仙の腕を掴んだ

しまった、と思った時にはもう遅い

両手両足を拘束され化け物の顔の前方で大の字の格好にされる

化け物は成人男性ほどは一飲みできそうな程に口を開き、口の真ん中には黒い光球を作り出していた

アレを喰らうのはマズイ

直感がそう告げている

しかしこのままでは回避することも出来ない

仙はここで一つの賭けに出た

化け物との距離は約七メートルほど

この距離から『自分』を出現させる

意識を集中させ、心は落ち着かせる

そして

「
!？」

見事にそれは成功した

突如として現れた仙の足は見事に化け物の顎を蹴りあげて口の中で爆発をさせる

「
！！！」

流石に今回ののは効いたらしく苦しそうに声を上げる化け物

「はあはあはあ、ざまあみる」

仙は悪態をつきながら右手に武気を込める

「お前が何者でなにをしていたかは知らない、でもお前は俺の日常が壊れ始めてから最初の敵だった、だから敬意を払って全力で倒してやる」

気脈を司る経路を制御し、膨大な気を循環させながら圧縮させ、もはや物質化するほどの闘気が拳に集まる

「じゃあね、化け物さん」

そして化け物へと向かって跳躍と共に弾けた余剰の生命力は周囲一帯に伝播し、死にかけていた草木や動物が一気に立ち直るほど、仙が練った気の総量は夥しいものだった。

一直線に飛び出し、標的目掛けて振り下ろされる渾身の一撃。

それを同時に二十も放つという絶技を繰り出す。

まともに食らえば、例えどんなやつでも絶対に無事ではいられない。

「おおおおおおおオオツ

」

噴き上がる生気の圧が爆発し、第三者から見たら、その残光がまるで翼のように見えた瞬間。

「玖錠降神流

陀羅尼孔雀王だらかんくやくわうオオツツ！！」

まるで天から落ちた災害であるかのごとく、総計に十発に及ぶ鉄槌が化け物を打ちぬていた。

毒を浄化し、七難摧滅を成す破魔孔雀

その名に相応しい

過剰なまでの生命圧を纏った拳は、人外の異妖に特効的な痛打を浴びせる。

今それを前に、化け物の抵抗力は零となり

「

！！！！」

化け物は断末魔の声と共に崩れ落ちたのだった。

「終わっ……た」

もうなにもないことを確認して僕は地面に座り込む

駄目だ、疲れちゃった。

目の前では化け物が光となって消えていく。

それを見て僕は、ようやく本当に勝ったんだと実感した。

本当ならその余韻に浸りつつここで休憩をしていたいが、向こうからサイレンの音が聞こえてきているし、はやく逃げよう。

僕は疲れで重くなった体を引き摺って家へと向かうのであった。

第六幕（後書き）

年末はみんな忙しいそうですね

みんな頑張って!!

僕は応援していますWWW

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4950y/>

魔法少女リリカルなのは～魔王に愛されし少年～

2011年12月10日00時59分発行